

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：43602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25862156

研究課題名(和文) 手足症候群予防におけるセルフケア促進のための看護プログラム作成に関する研究

研究課題名(英文) Research on the nursing program creation for the self-care promotion in hand-and-foot syndrome prevention

研究代表者

山下 梓(YAMASHITA, AZUSA)

飯田女子短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：00457904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：化学療法の治療薬の副作用である手足症候群を発症している患者の実態について調査するとともに、発症予防のためのセルフケアについて検討することを目的に本研究を実施した。手足症候群を発症している患者を対象に、半構造的インタビュー調査とSkindex29を用いたアンケート調査を実施し、分析した。また、これらの結果をもとに、「指導用パンフレット」と「セルフケア日記」を作成しており、セルフケアの促進について研究を進めているところである。

研究成果の概要(英文)：This research is considering the self-care promotion for development-of-symptoms prevention of hand-and-foot syndrome. To the patient who has shown the symptoms of hand-and-foot syndrome, I carried out semi-structured interviews investigation and the questionnaire using Skindex29, and investigated the actual condition of the patient who has shown the symptoms of hand-and-foot syndrome. Based on the result, I create "the pamphlet for instruction", and a "self-care diary", and it is in progress about the research on promotion of self-care.

研究分野：がん看護

キーワード：手足症候群 化学療法

1. 研究開始当初の背景

がんは国民病とよばれ、2人に1人ががん罹患する時代である。以前はがんと言えば手術療法であったが、現在は化学療法や放射線療法などを併用した集学的治療が主流となっている。化学療法においては、年々新薬が登場しており、特に分子標的治療薬は発展が著しい。分子標的治療薬は特定の分子を標的にすることで、副作用が少ないことが期待されていたが、実際には皮膚症状をはじめとする多くの症状が報告されている¹⁾²⁾。皮膚症状のひとつに手足症候群があり、その生活面への影響の大きさが近年注目を集めている。

手足症候群の発症予防のためには、保湿剤塗布などのセルフケアが効果的であると言われているが、実際は患者のセルフケアの実施は定着していないといわれており、特に発症予防のためのセルフケアの実施率は低い³⁾ことが報告されている。また、手足症候群が発症することで、日常生活には様々な不自由が生じるため、その影響は大きく心身ともにQOLは低下すると考えられる。しかしながら、実際の生活への影響やセルフケアの実態などの手足症候群の患者の実態については明らかになっていない現状があることから、手足症候群発症の予防のためのセルフケア促進について本研究に取り組むことで、生活の質の維持や可能な限りの治療継続は患者にとってベネフィットになると考えた。

2. 研究の目的

化学療法を受けており手足症候群を発症している患者の手足の皮膚症状、困り事などの日常生活への影響やセルフケアについての実態を明らかにし、手足症候群に対する看護の示唆を得る。

3. 研究の方法

A県内の2つの総合病院内に設置されている外来化学療法室に通院治療をしており、手足症候群を発症している20歳以上の患者を

対象にインタビュー調査と皮膚の状態観察、アンケート調査を実施した。患者の選定は化学療法室に勤務する看護師に依頼し、同意が得られた患者を対象とした。インタビュー調査は半構造化面接で、手足症候群の症状やセルフケア、日常生活での困りごとや思いなどを患者が自由に語れるような質問とし、化学療法による治療中の患者であるためインタビュー中の体調を常に観察しながら実施した。インタビューは個室で実施し、インタビュー内容は許可を得てICレコーダーに録音し、終了後に逐語録を作成した。皮膚の状態観察では、担当看護師とともにグレード[有害事象共通用語基準 v4.0 日本語訳 JCOG 版 (略称: CTCAE v4.0-JCOG)]を評価し、対象者の許可を得て写真撮影をした。アンケートは Skindex29 尺度を用いた皮膚に関連した健康関連 QOL 調査で、インタビュー後にアンケート用紙と切手を貼った封筒を渡し、回答は任意であることを説明し回答後は郵便ポストに投函するよう依頼した。

分析については、インタビュー調査は ICレコーダーに録音したインタビューの内容(症状、セルフケア、思いなどの体験)について逐語録を作成し、何度も熟読し、質的帰納的に分析をした。逐語録から手足症候群に関連する内容をコード化として抽出し、コードを類似性のある事柄ごとに整理分類し、サブカテゴリー・カテゴリー化した。アンケート調査は、SPSS ver.23 を用いて、Skindex29 の 30 項目について、記述統計で中央値を求めた。

倫理的配慮については、対象者には紙面を用いながら口頭で研究説明を行い、同意を得た上で実施した。インタビュー調査は対象者が希望する日時に個室で実施し、個人が特定されないようにプライバシーの保護に努めた。また、アンケート調査は、回答は任意であることを説明したのちに調査用紙と投函用封筒を配布した。研究を通して知

り得た情報や撮影した写真は鍵のかかる書庫で保管した。

なお、本研究は研究者の所属施設と調査実施施設のそれぞれの倫理委員会の審査を得て実施した。

4. 研究成果

調査期間は2014年10月～2015年11月である。A県内の2つの総合病院で化学療法を受けており手足症候群を発症している患者9名(表1)を対象に研究を行った。うち1名は、手足症候群の症状のため化学療法中止中であった。対象者は男性4名、女性5名、平均年齢は69.4歳であった。手足症候群のグレードについては、Grade1が3名、Grade2が5名、Grade3が1名であった。インタビューは、治療の待ち時間や治療中の時間を利用して個室で実施し、インタビュー時間は平均23分であった。

表1 対象者の概要

男性:4名 女性:5名

平均年齢:69.4歳

職業:無職8名 農業1名

Grade1:3名 Grade2:5名 Grade3:1名

Gradeは、有害事象共通用語基準 v4.0 日本語訳 JCOG版 (略称:CTCAE v4.0-JCOG)に基づいて行った

インタビュー調査の結果、100のコードが抽出され、39サブカテゴリー、16カテゴリーに分類され、症状 セルフケア 発症前のセルフケア 困りごと 思いの5つの項目に整理された(表2)。

症状 では、34コード、15サブカテゴリー、5カテゴリーに分類された。【皮膚の色が変化する】では、<手の皮膚が赤くなる> <手の皮膚が黒ずむ>の2サブカテゴリーで構成された。【皮膚に異変が生じる】は7つのサブカテゴリーで構成され、<手の皮がむける> <皮膚が乾燥する> <皮膚にひび割れがある>などであった。また、【皮膚の感覚が鈍くなる】は2つのサブカテゴリーで、<皮膚が厚くなったような感じがする> <皮膚の感覚がよくわからない>であった。

【疼痛がある】は、<足のひび割れが痛い>などの3つのサブカテゴリーからなり、【関節が曲がらない】は、<指が曲がらない>の1つのサブカテゴリーで構成された。

セルフケア は、38コード、11サブカテゴリーで構成され、【保湿剤を塗る】【保湿剤を塗らない】【手足の皮膚を保護する】の3つのカテゴリーに分類された。【保湿剤を塗る】は、<症状がひどい時に保湿剤を塗る> <手洗い後に保湿剤を塗る> <時間や回数や部位を決めて保湿剤を塗る>など5つのサブカテゴリーであった。【保湿剤を塗らない】は、3つのサブカテゴリーで構成され、<痛みや症状が少ない時は保湿剤を塗らない> <手洗いをするので、保湿剤を塗らない>などであった。【手足の皮膚を保護する】は、<痛い時はテープを貼る> <手袋をはめる> <靴下を履く>の3つのサブカテゴリーであった。

発症前のセルフケア は、6コード、4サブカテゴリーで、【発症前は保湿剤を塗っていない】【発症前から保湿剤を塗っていた】の2つのカテゴリーに分類された。【発症前は保湿剤を塗っていない】は、<症状がないので保湿剤を塗らなかった> <保湿剤を塗る必要がないと思っていた>の3つのカテゴリーで構成された。【発症前から保湿剤を塗っていた】は、<看護師の促しで発症前から保湿剤を塗っていた>のカテゴリーであった。

困りごと は、11コード、4サブカテゴリー、3カテゴリーで構成された。カテゴリーは【困りごとはない】【歩行が困難である】【指の動きが悪いため動作が不自由である】であり、【困りごとはない】【歩行が困難である】はそれぞれひとつのサブカテゴリーで構成された。【指の動きが悪いため動作が不自由である】は、2つのサブカテゴリーで構成され<物をつかんだり、持つなどの指先の細かい動作ができない> <指の動きが悪い

め、清潔・更衣・排泄行為ができない>であった。

思い は、11 コード、5 サブカテゴリーで、【心配になる】【気持ちが揺らぐ】【あきらめの気持ちがある】の3つのカテゴリーで構成された。【心配になる】は<今後の状態が心配である>の1つのカテゴリーで構成された。【気持ちが揺らぐ】は<症状が出て大変だと思った>などの2つのカテゴリー、【あきらめの気持ちがある】は<症状が出るのは仕方がない><他者の視線が気になるが仕方がない>の2つのカテゴリーで構成された。

インタビュー調査からは、ほとんどの患者が何かしらの症状を抱えていた。また、生活に不自由さを感じている人が多く、発症後にセルフケアを実践したり、工夫をしている現状があった。また、仕方がないといったあきらめの気持ちを抱いている人も多いが、心配な気持ちややる気を失うという患者もいた。

表2 手足症候群を発症した患者の体験

症状	皮膚の色が変化する	手の皮膚が赤くなる 手の皮膚が黒ずむ
	皮膚に異変が生じる	手の皮がむける 皮膚が乾燥する 皮膚にひび割れがある 水疱ができる 切れて出血する 指先に熱を持つ 爪がさける
	皮膚の感覚が鈍くなる	皮膚が厚くなったような感じがする 皮膚の感覚がよくわからない
	疼痛がある	足のひび割れが痛い 手のひび割れが痛い 痛みがある
	関節が曲がらない	指が曲がらない
セルフケア	保湿剤を塗る	保湿剤を塗る 症状がひどい時に保湿剤を塗る 看護師に指導されるので保湿剤を塗る 手洗い後に保湿剤を塗る
	保湿剤を塗らない	時間や回数や部位を決めて保湿剤を塗る 痛みや症状が少ない時は保湿剤を塗らない 手洗いをするので、保湿剤を塗らない 保湿剤を持ち歩けないので塗らない
	手足の皮膚を保護する	痛い時はテープを貼る 手袋をはめる 靴下を履く
	発症前のセルフケア	発症前は保湿剤を塗っていない 症状がないので保湿剤を塗らなかった 保湿剤を塗る必要がないと思っていた
困りごと	発症前から保湿剤を塗っていた	看護師の促しで 発症前から保湿剤を塗っていた
	困りごとはない	困っていることはない
	歩行が困難である	歩行が痛くて大変である 物をつかんだり、持つなどの 指先の細かい動作ができない 指の動きが悪いため、 清潔・更衣・排泄行為ができない
思い	心配になる	今後の状態が心配である
	気持ちが揺らぐ	症状が出て大変だと思った 症状が出てやる気がなくなった
	あきらめの気持ちがある	症状が出るのは仕方がない 他者の視線が気になるが仕方がない

また、Skindex29 尺度を用いたアンケート調査は、回収率 100%、有効回答率 100%であった。Skindex29 は 30 項目で構成されており、「1:まったくなかった」「2:ほとんどなかった」「3:ときどきあった」「4:しばしばあった」「5:いつもそうだった」の5段階の評価であった。分析の結果、「5:いつもそうである」「4:しばしばあった」の項目を合わせると 10 項目であり、「1:まったくなかった」は 7 項目であった。「5:いつもそうである」の項目は、『皮膚に痛みを感じた』『皮膚の状態のせいで、ゆううつになった』『皮膚の状態がもっと悪くなるのではないかと心配だった』であった。「4:しばしばあった」項目は、『皮膚の状態のせいで、仕事や趣味をするのに支障があった』『皮膚にかゆみを感じた』『自分の皮膚の状態に、腹が立った』『皮膚の薬や治療の副作用が心配になった』『皮膚がぴりぴり、ちくちくした』『皮膚の状態のせいで、疲れてしまった』であり、手足症候群の発症により、皮膚の痛みやかゆみなどの症状が多くみられているとともに、気持ちの落ち込みや不安、生活への支障があった。「1:まったくなかった」項目は、『皮膚の状態のせいで、人とのつきあいがうまくいかなかった』『皮膚の状態のせいで、人といっしょにいたくないと思った』『自分の皮膚の状態のせいで恥ずかしい思いをした』などであり、皮膚の状態によって対人関係への影響はないという結果であった。

また、これらの結果から、予防的セルフケアの重要性が示され、症状やセルフケアの内容などから「指導用パンフレット」「セルフケア日記」を患者の実際の使用をもとに、何度か修正して作成した。今後は、この資料を用いた調査を進め、効果的な発症前のセルフケアについて検討したいと考える。

表3 Skindex29を用いたアンケート結果

質問項目	中央値
1. 皮膚に痛みを感じた	5.00
2. 皮膚の状態のせいで、よく眠れなかった	3.00
3. 私の皮膚の状態は深刻なのかもしれないと心配だった	3.00
4. 皮膚の状態のせいで、仕事や趣味をするのに支障があった	4.00
5. 皮膚の状態のせいで、人とのつきあいがさまたげられた	3.00
6. 皮膚の状態のせいで、ゆううつになった	5.00
7. 皮膚が焼けるように痛んだり、激しく痛んだりした	3.00
8. 皮膚の状態のせいで、家にこもりがちだった	2.00
9. 皮膚に跡が残るのではないかと心配だった	3.00
10. 皮膚にかゆみを感じた	4.00
11. 皮膚の状態のせいで、家族、恋人、友人など大切な人との距離が開いてしまった	2.00
12. 自分の皮膚の状態をひどい恥ずかしいと思い、自分を責める気持ちになった	2.00
13. 皮膚の状態がもっと悪くなるのではないかと心配だった	5.00
14. 皮膚の状態のせいで、一人で何かをすることが多くなった	1.00
15. 自分の皮膚の状態に、腹が立った	4.00
16. お風呂に入ったり手を洗ったり、水を使うと皮膚の状態が悪化した	3.00
17. 皮膚の状態のせいで、愛情を表現するのが難しかった	1.00
18. 皮膚の薬や治療の副作用が心配になった	4.00
19. 皮膚がびりびり、ちくちくした	4.00
20. 皮膚の状態のせいで、人とのつきあいがうまくいかなかった	1.00
21. 自分の皮膚の状態のせいで恥ずかしい思いをした	1.00
22. 自分の皮膚の状態は、家族、恋人、友人など大切な人たちにとっても問題である	3.00
23. 皮膚の状態のせいでいらいらした	5.00
24. 私は敏感肌だ	3.00
25. 皮膚の状態のせいで、人と一っしょにいたくないと思った	1.00
26. 皮膚の状態のせいで、恥をかいた	1.00
27. 皮膚から、出血した	2.00
28. 皮膚の状態のせいで、うっとうしく感じた	3.00
29. 皮膚の状態のせいで、性生活に支障があった	1.00
30. 皮膚の状態のせいで、疲れてしまった	4.00

* ここの1週間でどんなことがあったかを問いて回答してもらっている

< 引用文献 >

- 1) 狩野洋子：分子標的治療薬による手足症候群，Biotherapy, 25(2)，2011，633 - 637 .
- 2) 佐藤温 他：外来がん化学療法におけるリスク管理 皮膚障害，癌と化学療法，38(11)，2011，1767-1772 .
- 3) 佐々木好美 他：がん化学療法におけるスキンケアの実態調査，癌と化学療法，37(9)，2010，1741-1745 .

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔 雑誌論文 〕 (計 件)

〔 学会発表 〕 (計 件)

〔 図書 〕 (計 件)

〔 産業財産権 〕

出願状況 (計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：

番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔 その他 〕
 ホームページ等

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

山下 梓 (YAMASHITA , Azusa)
 飯田女子短期大学・看護学科・講師
 研究者番号：00457904

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：